

視覚障害者の美術鑑賞ガイド実践例から —絵画鑑賞における立体コピーの使用方法について— 深山孝彰

愛知県美術館では教育普及活動における「各種鑑賞プログラム」の一つとして、児童・生徒や学校の教師向けのものとは並び、1998年から視覚障害者を対象とした鑑賞会をおこなっている。こうした活動は当館独自のものというわけではなく、視覚に障害をもつ人に美術を鑑賞していただくという動きは徐々にではあるが全国的にも高まっており、2003年8月には世田谷美術館を会場として「ミュージアムアクセスグループ全国会議」が開催されている。近隣の地域では、名古屋市美術館が1989年の「手で見る美術展」、1994年の「心で見る美術展 私を感じて」という企画展をはじめとして先進的に取り組んでおり、岐阜県美術館は『視覚障害者のための所蔵品ガイドブック』（1は2000年、2は2001年発行）を制作している。鑑賞ガイドを行うための手引書や優れた論考も増え（註1）、特に近年では言葉による鑑賞法の研究が盛んである。美術館としての基本理念から視覚障害者の美術鑑賞実践までの細かなノウハウはそれらでほとんど網羅されているが、本稿では当館の活動の中から、絵画鑑賞の補助手段としての「立体コピー」制作とその使用法に関する試みについて報告し、若干の提言を行ってみたい。

■鑑賞会開催の経緯と状況

前提として、当館での鑑賞会のあり方について述べておく。1992年10月の開館後ほどなく、ジュリア・カセム氏（美術館教育・障害者向け美術教育の専門家で、ジャパンタイムズの美術コラムニストを務めていた）が主宰する障害者とボランティアの美術鑑賞団体「アクセス・ヴィジョン」グループの活動を受け入れたところから、視覚障害者の美術鑑賞への意識が生まれた。その後1994（平成6）年度から、「名古屋YWCA美術ガイドボランティアグループ」（1993年発足、以下「YWCA」と略す）が自主的に実施する鑑賞会を受け入れるとともに、障害者とその付き添いへの観覧料金割引制度についての話し合いなどを通して相互理解を深めてきた。そして1998年度に開館5周年展として開催した「近代美術の100年—愛知県美術館コレクションの精華」時に、愛知県美術館の主催、YWCAグループの協力という形で「視覚に障害のある方へのプログラム」と題した鑑賞会をおこなった。以後この協働でプログラムを継続し、毎年2日間を午前・午後に分けた4回程度実施している。2001年からは、名古屋市美術館の解説ボランティア中の有志も見学や特別参加の形で加わり始めており、また2004年から名古屋と岡崎の盲学校に呼びかけ、夏休みの一日に鑑賞会を行っている。これらは当館の所蔵作品展を鑑賞するものだが、2001年の「ロダンと日本」展や2003年の「戸谷成雄展」などでも非公式ながら鑑賞会をもち、2005年の「ゴッホ展」では共催者の理解も得て休館日に特別鑑賞会を開催した。ゴッホ鑑賞会では午前・午後合わせて60名近い参加申し込みを受け、これに対応するためガイドには愛知県美術館友の会会員も加わった。この一日のためにゴッホの作品7点に解説と立体コピーを作成したほか、ゴッホの自画像説明のため油彩用のパレットと筆を用意してゴッホと同じポーズをとってもらったり、《ひまわり》の一部を油彩で模写して画布と筆触の手触りを知ってもらった。

YWCA美術ガイドグループは、名古屋YWCA中の視覚障害者のためのテレフォンサービス・音声訳・点訳グループと並んで活動しており、視覚に障害のある人2名を含む約20名の会員と、協力会員十数名を有している。当館との協働のほか小グループでも各地の美術館に出かけ、『視覚に障害のある方を対象にした絵画説明の手引』（1998年。2001年改訂）や『調べてきました美術館一目の不自由な方と訪れるために』（2001年第1集、2003年第2集）を発行している。全国にあるこうしたボランティアグループの中には、視覚障害者とガイドとが対等の立場

で共に美術鑑賞を楽しむという理念から、事前学習や作品の説明に重きを置かないところもあるが、YWCAは作品を伝えようとする意識が強く、図録などから選んだ作品図版を人には見せずに言葉で説明し、皆に聞いてもらう練習などもしている。当館での鑑賞会はこのYWCAの協力を前提としたもので、障害者1人ごとにボランティア1~2名が付き添って、展示室の案内誘導と作品の説明をおこなっている。回ごとに「戦後の日本画」「人体の表現」といったテーマを設定し、重点を置く作品には解説文（点字および弱視者用大文字プリント）を用意している。点訳は名古屋市女性センターで活動しているボランティアグループ「六点会」のお世話になっている。大文字プリントはB4判縦の用紙で、上部に作家・作品名や制作年、技法材質のデータを示し、本文は18ポイント程度の文字で30字×20行以内を目安としている。点訳後点字プリンター用紙1枚の両面に収まる分量にしたいと、漢字が多くなった場合は文字数を減らすことが望ましい。鑑賞会開催の約一週間前にはリハーサルとして、学芸員からボランティアへの作品解説と、説明手順などの検討をしている。ここでは解説文に記したような基本事項を覚えてもらうことよりも、作者の表現意図やその作品の優れた点などを理解してもらうことを重視している。ガイドする人がその作品を好きになることが、鑑賞者との生き生きとした対話を生むことになる。

■立体コピーとは

さて、鑑賞会本番では、ブロンズなど丈夫な立体作品は手で触れて鑑賞してもらうが、触れることのできない絵画作品の鑑賞補助として、立体コピーを使用している。これはカプセルペーパーという特殊な紙を用いたもので、この紙に下図をカーボンコピーし、専用の赤外線ランプで熱を加えると、黒い部分が発泡し盛り上がる。鑑賞者に画面全体の形（縦横比）を認識してもらうため、枠をはっきりと描き、下方に作家・作品名を点字で表示することになっている。使用にあたっては、画板などを下に敷き、鑑賞者の胸前など一定の位置に固定した上で、画面の枠、中心となるモチーフ、そして周辺へといった具合に、言葉を添えながらなぞってもらう（手を取って飛び飛びに移動したり、コピー全体をふらふらと動かしては、どこに触れているのかわからなくなる）。立体コピーの見た目がいかに良くできようとも、実際に手が触れなければ白紙と同じであり、ガイドする人は事前に自分で目を閉じて触れ、手順を考えておく必要がある。

立体コピーはあくまでも鑑賞会の中で使われるものであり、これと解説文とを合わせても、画集のように擬似鑑賞ができるものではないが、鑑賞会后、希望者には差し上げて反芻の役に立ててもらっている。

では、当館が試行錯誤を繰り返しながら作ってきた立体コピーの例をご紹介します。

■愛知県美術館が制作した立体コピーの実例

A：線のみによる作図

●中村彝《少女裸像》（図1）、東山魁夷《雪の山郷》（図2）

当館で制作した最初期のもので、いずれも輪郭を縁取る線のみで描いているが、現在においても立体コピーの標準的な作り方といえるだろう。《少女裸像》の立体コピーでは人物と椅子の外形を太い線で、椅子に掛けた布の模様は細めの線で表し、背景の壁の模様は煩雑さを避け縦の線のみ描いている。《雪の山郷》では斜めに重なる山の稜線と麓の三つの林の輪郭を太い

線で描くが、それぞれの区画内の樹木は部分的にのみ取り出しており、ガイド時に言葉で補うこととなる。原作では色彩によって明瞭に地形が見分けられるが、線だけでは各ブロックの領域や奥行きを把握することがかなり難しい作品である。

B：部分拡大図の効用

●瑛九《黄色い花》（図3）

立体コピーのA4判という判型は多くの場合作品よりもかなり小さく、作品の細かな部分を伝えるためには部分図がほしいときがある。青灰色の地に様々な色の斑点がちりばめられた《黄色い花》のコピーはYWC Aメンバーが制作したものである。全体図の立体コピーは目で見るとわかりづらそうだが、手を置いてみると一つ一つの斑点にちょうど指の腹がはまり、線をなぞらなくても輪のような形であることはわかる。一方部分図は、この作品のほぼ中央にあり題名のもとになっているとも思われる黄色い色斑を一つだけ取り出したもので、この大きさで初めてぎざぎざの形が感知される。ここでガイドをする人は、このぎざぎざが線として描かれたものではなく、形の内側と外の地それぞれに放射状に塗られた筆のタッチがぶつかる境目であることを説明し、こうした表現によって、画面が細かく振動し色斑が明滅するかのような効果があげられていることへと話を深めていくことができる。

C：面の表現（1）―塗りつぶし・細線の使用

●加山又造《黒い鳥》（図4）、田淵俊夫《すぎばやし》（図5）

線のみによる立体コピーでは、私自身が目を閉じて触れてみても、輪郭線で囲われた範囲が大きくなるとその全体像がつかみづらくなり、また線の内側（モチーフ）と外側（背景）との区別が難しいこともまま感じられた。

戦後の日本画に重点をおいて開催した鑑賞会で選んだ絵の中で、加山と田淵の作品はいずれも細く長い線が多用されていることと、同種のモチーフがいくつも描かれていることが特徴であった。《黒い鳥》は窓のブラインドのようにテープが束になった帯が複雑に交錯する空間の手前で、鴉のくちばしと爪を鋭くしたような鳥が十数羽、争うように飛び交っている。立体コピーでは帯の中の細い線は省略したものの、依然錯綜した印象が強かったため、鳥たちと画面右上方の緑色の長六角形を黒く塗ったものも試作した。結果として、鳥の形全体が盛り上がったものの方が予想以上にわかりやすかった。原画の鳥の翼は表と裏で濃さが違うが、あえて区別をつけなかった判断も妥当と思われる。

《すぎばやし》は四曲屏風の長い画面手前でまだ細く若い二本の杉の木が枝葉を広げ、やや霞んだ奥に高い杉の幹が垂直に立ち並んでいる。この作品の場合、木の輪郭線だけを描いたのでは樹木と間の空間の区別がつかなくなるので、原画にも見られる樹皮の縦線を入れてみた。原画の線はもっと多いが、コピーは縮図でありまた加熱によって盛り上がる際に線が膨張するため間引いており、輪郭線を特に太くすることもやめた。枝葉の部分もチリチリとした感触を狙って数を減らし、強制的に描いた。そして手前の若木は最も高く盛り上がるように濃くしている。立体化後は、《黒い鳥》と同様にモチーフと背景の区別がはっきりとしたのに加えて、塗りつぶしとは異なる感触が得られた。幹の部分に指を置くと、細線の間隔が狭いため面に近

い感触だが、線に沿った上下方向には指がよく滑り、逆に左右方向では抵抗感がある。この感触をうまく応用できれば、《黒い鳥》の帯の流れを示すことも可能ではないかと思われる。

D：面の表現（2）—網がけとその手触りの可能性

立体コピーによって面を表す方法として、塗りつぶしのほか細かなドットを打ったり斜線を引くといったことが以前から試みられていた。しかし黒く塗りつぶすとそこだけが極端に盛り上がり、淡く塗るとコピー機の調子によっては反応しないことがある。またドットや斜線のハッチングでは、指が点や線を認識してしまうことが多く、作品に描かれている点や線と混同したり、「この点々は面を表しているのだ」という意識の置き換えを要するきらいがある。

良い方法はないかと思案していたところ、立体コピー現像機の取り扱い説明書中にあった「広い範囲を均一に盛り上げるには網がけを用いるとよい」という記述が目にとまり、同時に、網がけのパターンによって複数のモチーフが区別できるのではないかと考えた。この方法で初めに試作したのが香月泰男の《散歩》である。

●香月泰男《散歩》（図6）

網がけを用いたのは、この絵の主役である犬、その上方に立つ人の足、犬の左に生えた植物の葉の三つで、それぞれに網のパターンを変えている。従来どおり線で描き起こしたコピー下図にあわせて、薄い紙にプリントした網がけパターンやスクリーン・トーンなどを切り貼りする。私は現在に至るまで手作業だが、下図をパソコンに取り込んで網がけをすると作りやすいだろう。犬はかなり濃いパターンを用いて全体の形を大きく切り取り、脚の間や指・耳・首輪などは修正液で白く抜いた。人の足は少しざらつくように粗いハーフ・トーンとし、貼ったのちあらためて輪郭線で囲った。水気の少なそうな草の葉には太目の格子縞を選び、手前の濃い葉の部分はペンで縞の目を埋めた。

自分の感触では期待どおりの結果が得られたため、YWCAグループ内の視覚に障害のある方にも触れてもらったところ、これまでより格段にわかりやすくなったこと、そしてそれ以上に、自分たちのために工夫してくれたことが嬉しいとの言葉を頂き、意を強くした。

面の表現が容易になったことによる更なる利点として、それまでは紛らわしい要素として省略せざるを得なかった細かい線などを残す余地が広がったことがある。《散歩》の人の足の下に並ぶ三角や四角の線は影の中の形で、まぶしい日差しで白い壁のように見えるこの場所に実は凹凸があることを示していると思われるが、この線を描いておくことで、そうした話題を広げていくことも可能となる。

●小林古径《洗濯場 その1・その2》（図7）

大正11年から翌年にかけて前田青邨とヨーロッパに留学した小林古径は、各地で多くのスケッチを描いたが、作品として仕上げたのは、3月にイタリア中部の古都シエナで取材したこの2枚の《洗濯場》だけである。歴史ある建物で営まれる日常の情景にひかれたのだろう。どちらの作品も洗濯場だけを濃く描き、背景は淡い黄色の上に極力省略した線で表している。《その1》の洗濯場はアーチ型の口が二つ並んだ石積みの建物で、暗い内側一杯が水槽となっている。右の口の前で長いスカートにエプロン姿の女性が二人、こちらに背を向け洗濯をしている。ここは坂道と高い壁のすき間にあり、地面や建物の屋根に草や苔が点在している。《その2》は

集合住宅が立ち並ぶ街なかの、回廊式の洗濯場を見下ろして描いている。赤茶色の瓦屋根に囲まれ、色とりどりの服やスカーフを着た女たちのにぎやかな様子は、額縁の中の絵のようにも見える。

この2作品の立体コピー化にあたっては、古径が濃く表した主要モチーフを際立たせるために網がけを用いた。《その1》では入り組んだ地形の中にある洗濯場の建物に淡い網をかけて周囲と区別できる手触りをつくり、その上に特徴的なアーチ型や屋根草が強く盛り上がるよう描き起こしている。《その2》ではまさに額縁のような屋根を網がけで盛り上げ、さらに瓦の線が感じられるように線描を重ねている。背景の窓の一部が開いていることもわかるようにしたが、両作品ともこの紙サイズでは洗濯する女性たちの衣装や顔を表すことは無理なためシルエットとし、ガイドボランティアから言葉で描写してもらうことにしている。

●エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナー《グラスのある静物》、須田剋太《遊女之図》(図8)

YWCAグループのメンバーは、当館以外の見学先などの作品についても立体コピーを制作していたが、2002年にYWCA主催の「立体コピー実習研修」で3回にわたって私が講師をつとめて網がけの方法を伝え、多くのメンバーが制作に関わるようになった。自分でコピーを作ろうという意識を持つと作品の見方もまた深まり、ガイド時の使い方にまで細かく配慮が行き届くようになる効果がある。このキルヒナーと須田剋太のコピーはYWCAメンバーの作で、キルヒナー自作の木彫果物台とリンゴの網がけは似た濃さながらパターンを変え、手触りが異なっている。《遊女之図》では帯の模様や、画面余白の色紙型に書かれた文字の様子もわかるものとなっている。

E：朦朧表現

●横山大観《飛泉》(図9)

明治30年代に大観や菱田春草たちが取り組んでいた〈朦朧体〉(線を描かない没骨技法と西洋画法をあわせ、ぼかしによって光や空気を表現しようとするもの)の雰囲気近づけないかと試みた。立体コピーの主たるはたらきは、描かれたものの位置関係や、おおよその形と大きさを示すものと割り切ってはいるが、鑑賞者が言葉で聞いて思い描いた表現と、コピーの手触りとの違和感を少なくしたいと考えてのものである。

網がけとは逆にむらを出すため、下図制作は主に鉛筆を用いている。原画での3本の細い滝は、ぼんやり霞む暗がりを背景にした光の筋のようで、滝壺が白く輝いているが、立体コピーでは黒い部分が盛り上がるため、白黒を反転させた。岩の濃淡も原画に合わせてはいない。3羽の燕はインクではっきりと描くが、燕の様子はガイドに語ってもらう。中景に浮かぶ樹木の枝葉は丸めたティッシュペーパーにスタンプ用インクをつけて叩き、濃い部分に修正液で点を打って、もこもことした手触りを狙った。極めてアナログ的な作り方であり、画面左上の薄い樹葉は実際ほとんど盛り上がらなかったが、滝の水が徐々に幅と厚みを増していく感じなどはほぼ予想通りにできた。こうした微妙な手触りは、ミューズ・プリント等と呼ばれる樹脂インクによる立体印刷では作れないものである。

F：作品の解釈と強調

●ポール・デルヴォー《こだま》（図10）

大きさや表現の上で制約の多い立体コピーにおいては、作品の特徴を端的にとらえ、わかりやすく表すことが重要となるが、この《こだま》では、線遠近法による画面構成を際立たせるとともに、風景の中で的人物の位置と姿を明示するための強調と省略を行った。

ジュリア・カセム氏のグループが当館で行った鑑賞会のなかで、この作品は参加者の反応が最も少なかったものとされている。遠近法による絵の構成は明確に理解できたものの、画家の意図がわからず、「なぜ真夜中に道を裸で歩いているんだろう」「なぜ3人で歩いているんだろうか」といった質問がされ、銭湯から帰って来るところだ、という冗談も出たという。これについてカセム氏は、絵の題材となったギリシア神話の妖精エコーの物語が参加者の文化的背景に基づいておらず、また参加者がシュルレアリスムの考え方になじんでいなかったからだと分析されている。しかしながら、《街路の神秘》という別題をもつこの作品は、神話をそのまま絵画化したものではない。私がのべ数百人の小学生と一緒にこの作品を鑑賞した経験では、「こだま」という言葉を知らない子供も「やまびこ」といえばわかる。そこで「ヤッホー、ヤッホー、ヤッホー」と次第に小さくなるよう唱え、3人の女性の意味はすぐに理解され、まさに針の落ちる音も響きそうな街並みの静けさにも意識が向けられていく。また、女性のポーズを真似てみると、その不自然な歩き方に気づきもする。ガイドする側の歴史的な知識が素直な鑑賞を妨げる場合があることにも要注意である。

この作品の解釈ということで、鑑賞会のために書いた解説文を示しておく。

【ベルギー生まれのデルヴォーは、人間の意識の奥に隠れたものを表そうとしたシュルレアリスム（超現実主義）の画家です。彼は夜の庭園や駅などの風景の中に、夢遊病者のようにさまざまな美女たちや生きた骸骨などを描いて、不思議な世界をつくり出しました。

《こだま》では、藍色の夜空の下に石造りの街並みが描かれています。画面の右下から、石畳の道が左奥へと伸びています。道の左には四角い石を積み上げた門や塀が連なり、右側には、ギリシア神殿のような円柱のある大きな建物が並んでいます。三日月の光で石は青白く輝き、また重々しい影に沈んで、冷やかな静けさを感じさせます。画面の四辺からは、道や建物の中のいくつかの直線が、遠近法に従って地平線上の一点に向かっており、絵の中に引き込まれそうです。道の奥から裸の金髪女性が三人、間隔をおいて歩いて来ます。彼女たちは同じ姿の大中小で、くり返すこだまを思わせます。先頭の一人はこの絵を見ている私たちの前を通り過ぎていくところで、足先が画面からはみ出しています。大きな瞳は虚ろで、上半身をかがめ、ドアをノックするように左手を上げたポーズは、耳を澄まして記憶の糸をたぐっているかのようです。また、後ろの二人はまわりの景色よりも急激に縮んでおり、彼女たちは別な空間の存在のようです。神秘的な幻想の場面です。】

さて、この作品の立体コピーには新旧の版がある。旧版は私の作ではないが、見たところかなり原画に忠実かつ丁寧に描かれており、人物の輪郭を太くしたり、道に落ちる影を明瞭にしようとするなどの工夫もなされている。ところが手で触れてみると、驚くほど絵柄がわからない。石畳は細い糸で編んだネットのようにしか感じられず、女性も後方の二人はどこにいるのかさえわかりづらいのである。視覚では遠近法で一点に集まる線が目立つが、触覚ではこれに

交わる線も均等に感じられるようだ。

新版では、遠近感にかかわる線をうんと強調してみた。両手の指を道や塀、建物の屋根などに乗せて動かすと自然に消失点へと導かれ、指を扶む線の間隔が狭くなっていくこともわかる。人物も原画の白い肌をあえて網がけとし、後方の二人の周囲を空けている。制作中には行き過ぎかとの懸念もあったが、強調によってようやく視覚と触覚が近づいたように思われる。このコピーをプログラム常連の方に試してもらったところ、それまで何度も説明を受けてきたこの作品の姿が、想像と全然違っていたとのことであった。

おわりに

以上、幾つかのタイプの例を紹介したが、2005（平成17）年度末現在、当館の所蔵作品に関しては、絵画の解説と立体コピーのセットが25種、彫刻・立体作品の解説が15種蓄積されている。他館に比べると多いかもしれないが、美術館に展示される作品数に比すればあまりに少ない。結局は言葉による鑑賞が主となるが、いくつかの作品で立体コピーを併用してみることで、鑑賞者とガイド者がお互いの言葉のニュアンスをより具体的に感じとり、コミュニケーションがとりやすくなるということもあるように思う。

視覚に障害のある人が、言葉による想像だけでも美術を楽しむことができるのは事実である。ただしその人が頭の中にどのようなイメージを描いているのか、現実の作品にどれほど近づけているのかはわからないが、それで良いのだという意見も多い。私自身、自分に美術鑑賞ができとは思っていなかった人や、目が見えていた頃は滅多に美術館に行かなかったという人が展示室でこやかに語り合う様子に接すると、美術を仲立ちとして人と人とが出会い、共に楽しく時を過ごすことができさえすればよいと思うこともある。だがその一方で、本当にその作品の姿を知りたい、作者が作品にこめた思いを受けとめたいと願う人があるなら、美術館は応える努力をすべきだと考える。

立体コピーを作れる環境にある美術館や人はまだ少ないし、立体コピーに触れての鑑賞を難しいものと思っている人も多いが、当館ではゴッホ展の特別鑑賞会で初めてこうした会に参加した方のかかなり多くが、持ち帰りや送付を希望された。まだまだ工夫の余地や可能性があることを知っていただければ幸いである。なお今後機会があれば、彫刻・立体作品の触察方法についてもいくつかの提案をしてみたい。

註

よくまとまった文献として、次のような著作をあげておく。

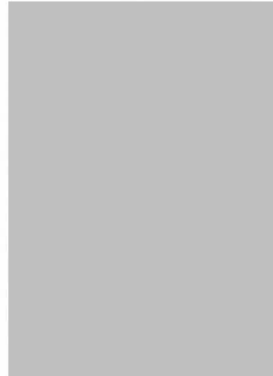
- ・ジュリア・カセム『光の中へ 視覚障害者の美術館・博物館アクセス』（1998年、小学館）
- ・角田美奈子「『心で見る美術展 私を感じて』に関する報告」（『名古屋市美術館研究紀要』第7巻、1997年）および「視覚に障害のある人への作品鑑賞ガイドの概略について」（同第12巻、2003年）
- ・エイブル・アート・ジャパン編『百聞は一見をしのぐ!? 視覚に障害のある人との言葉による美術鑑賞ハンドブック』（エイブル・アート・ブックス、2005年）



1 中村 雄 《少女裸像》



東山 魁夷 《雪の山郷》



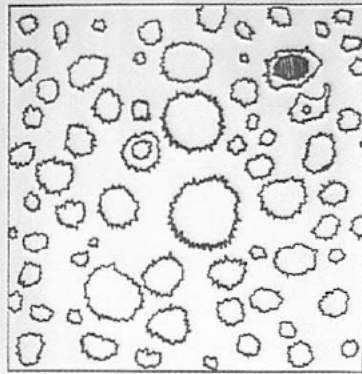
2 東山 魁夷 《雪の山郷》



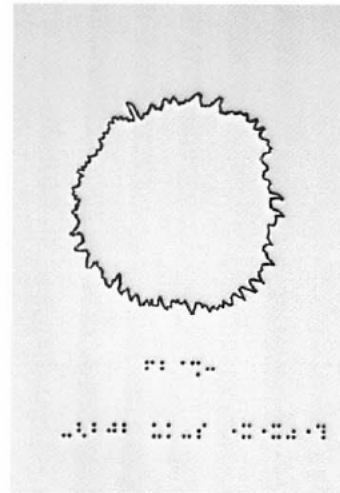
東山 魁夷 《雪の山郷》



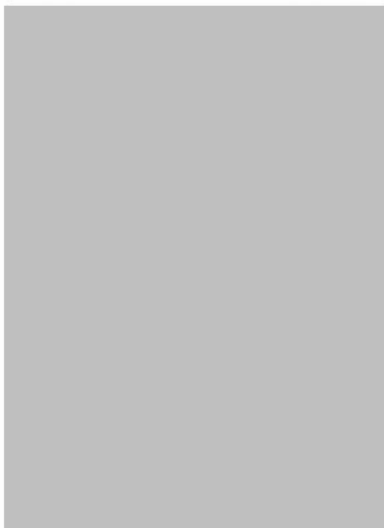
3 瑛九 《黄色い花》



瑛九 《黄色い花》



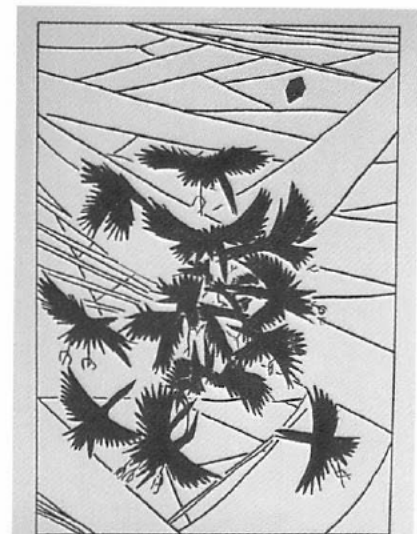
瑛九 《黄色い花》



4 加山又造 《黒い鳥》



加山 又造 《黒い鳥》



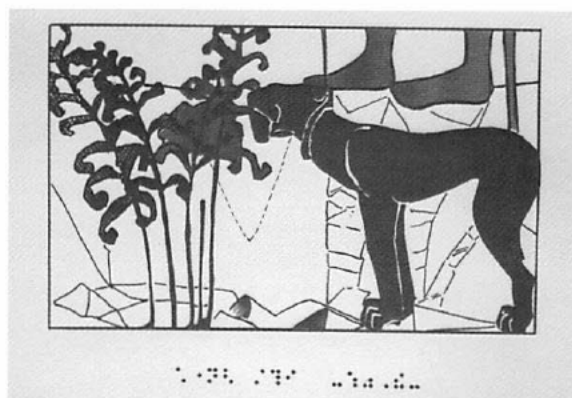
加山 又造 《黒い鳥》



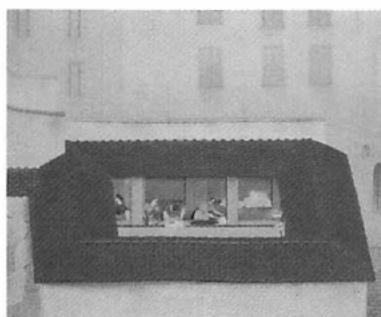
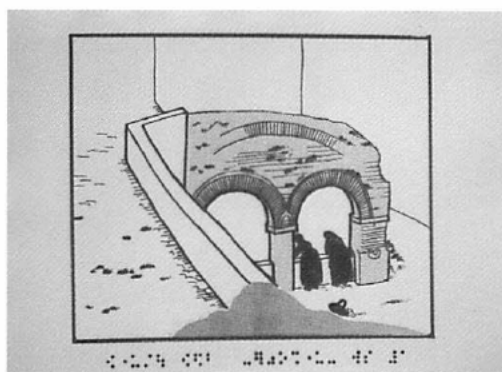
5 田淵俊夫《すぎばやし》



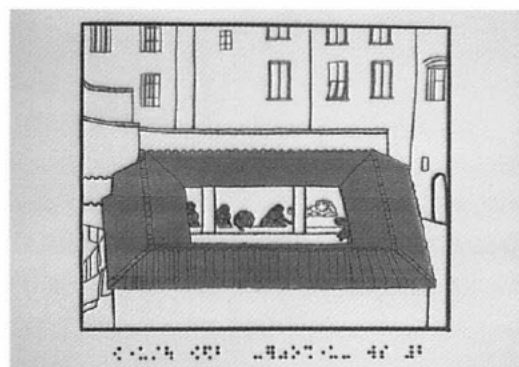
6 香月泰男《散歩》



7 小林古径《洗濯場 その1》

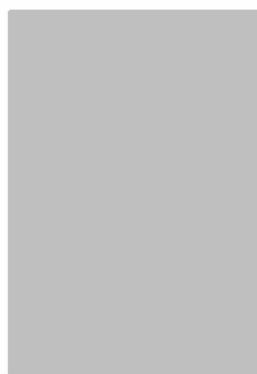


《洗濯場 その2》





8 キルヒナー 《グラスのある静物》



須田廻太 《遊女之図》



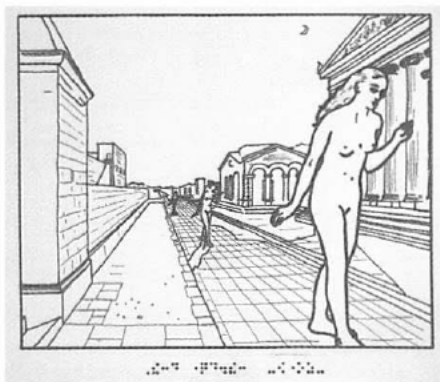
※YWCAメンバーの作例



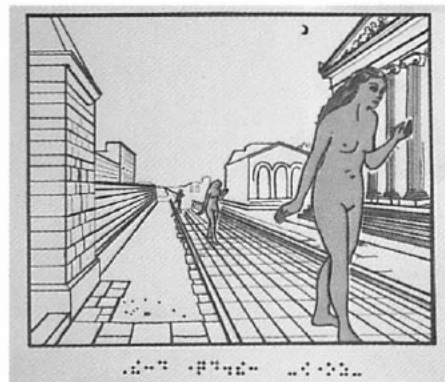
9 横山大観 《飛泉》



10 ポール・デルヴォー 《こだま》



旧版



新版